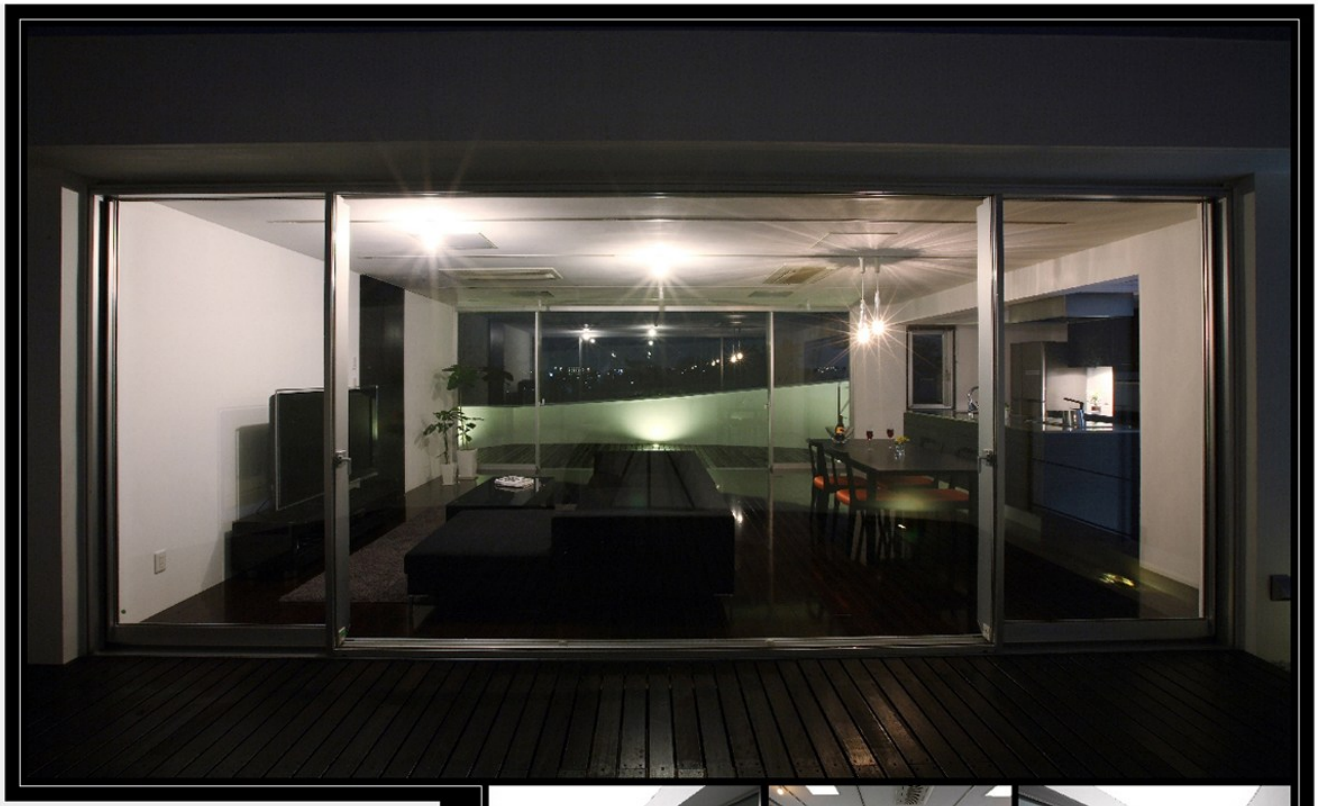
「境界=外壁面」は、必然的にパブリック（=街・近隣）空間を構成することになる。そこで、ランニングコストを考慮しつつ、「境界=外壁面」に配置された、大小の透明・不透明建具を施した「長方形窓」から漏れる、生活の光（=人工の光）を「街・地域」に流元する計画とした。

「抽象的な自然光」の内部空間に対し、夕暮れから夜間にかけてのひと時、「抽象的な人工（生活）の光」が、やさしく「街・地域」空間を流り だす。

また、夕暮のひと時、西側に向いている外壁（曲壁面）は、「西陽」で真っ赤に染まり、昼間や夜間とは異なった表情をもつこととなる。

時の流れ



境界のある家

まるで"街"を眺めているかのように、丘の上に佇む白が印象的な住宅は、"時の流れ"の中でその表情を変化させつづける。

方　針（具体的解答に向けての方針）

○ 自分らしく

子供の頃、バスケットシューズの紐の色や柄材、結び方などを変えたり、テニスラケットのグリップの削り方や滑り止めの巻き方などにこだわり を持っていました。今 々は特に固執したいわけでもなく、**「みんなで勝つ」**という唯一の目標のために最も**「自分らしい」**道具の使い方を知っていただけなのだと思います。そこには、**機能性と共に遊び心やちょっとした満足感**など色々な**「思い」**があり、とても豊かな時間だったのではないかと思っています。

人によっては、靴やラケットに重ね ず、箸箱・鉛筆・消しゴム・下敷き・・・etcにも似たような**「思い」**があったのではないかと考えています。

そこで、身近な**「道具たち」**と様々な方法で**「対話」**を交わし、より**自分らしく・自分に似合う道具**に変化させ、利用することは、豊かに進ずることに必要な要素のひとつであると考えるようになりました。それは、対象が**道具以外**においても同様であり、混沌とした都市社会の波の中で自分を見失わず、豊かな日常をおくるためには、共に暮らす**「ヒト・モノ・コト」**たちと多岐にわたる方法で、**「対話」**を交わし続けることがとても大切であると考えます。

○ 2つの空間

おぼろげに、都市社会の中で日常生活を送りながら、**「対話のための空間」**を核とした**「住宅」**が構成出来ないだろうかと考えるようになりました。そこで、日常生活を営む中での出来事から**「住空間」**を大きく2つに分類し、その一つを**「①他者との対話のための空間」**とし、もう一つを**「②自己との対話のための空間」**と位置付けることとしました。

この時、空間のあり方（性格）として、**他者と対話をする時**は、相手と適度な距離感をもたらすことを手助け出来るように、**「具体的風景が背景にある空間」**として性格付けし、**自己と対話をするために**は、静かな神へと誘うことを手助け出来るように**「抽象的な印象の空間」**として性格付けることとします。

※2つの空間	①他者との対話のための空間	＝	具体的風景が背景にある空間
	②自己との対話のための空間	＝	抽象的な印象の空間

空間く

▲ 外部テラス4

▲ リビング

▲ 外部テラス5

3階の「①他者との対話のための空間」は、具体的風景が背景となるように性格付けするために、まず「境界=外壁」の曲壁面を垂直に3階屋根のレベルまで立ち上げる。次に"西陽"のつよさと"夜光"を考慮に入れながら、南方向の視点にむけて、斜めに下がるようにスパンっと切り深とした造形とした。それは、ちょうど「竹取物語」の翁が竹筒で竹を切った時に、かぐや姫が顔をのぞかせているかのように、「①他者との対話のための空間」が"ひょっこり"と顔をのぞかせることとなった。
この造形によって、3階部分は、西南方向⇔北東方向に"大きな透明ガラス"面で挟まれた内外部一体の広がりのある空間を構成させたにもかかわらず、近隣からの視線を緩やかに隔てることが可能となった。

▲ 居室1・2から書斎版に夜室をみる

▲ 夜室から外部テラス3をみる

外部テラス4から浴室をみる ▶

主に2階の「②自己との対話のための空間」を構成することとなる曲壁面には、大小の透明・不透明建具を施した"長方形窓"を偏重に配置し、「剛体の厚重」に見られるような、「抽象的な自然光の空間」をやわらかい印象の「境界=外壁」（曲壁）で包み込む計画とした。
また、2階に配置された「浴室からつづく外部テラス2」と「夜室からつづく外部テラス3」の"厚外部"部分の「境界=外壁」の面には、"敵兵の大きなスリット"を施すことで、浴室・夜室とも大きな透明ガラス面をもちながらも、近隣からの視覚的プライバシーを保ちつつ、空間内に採光、通風をもたらすことを可能とした。

設計主旨

○ 境界を創造する（本計画のテーマ）

『住まい』の要素の一つである**『住宅』**を対象の敷地に建築しようとする時、建築基準法のもとで**『住宅』**たるボリュームは規制される。しかしながら**『住空間』**そのものを構成しようとする要素は、**『建築物の外壁・敷地境界線・地盤面』**などをはるかに飛び越え、街からの視線を受け、時にはプライバシーを侵害される可能性をも持ち合わせながら、**『四季の移り変わり・遠い星空・風の流れ・雨音』**などのヒトの感覚に直接語りかけてくれる背景と共に構成される。クライアントの**『仕事と暮事』**を**『時間』**としてだけでなく、**『気持ち』**としても区切りたいという要望を実現すべく、以下の記述を遂行することを目的とした。

『住宅』本来の命題である『安心で安全な居場所を確保する』ことを念頭に、「※2つの空間（①・②）」をやわらかく包み込む『内部空間』と『外部空間』の境界（注：本計画では、外壁）を慎重に計画することで、住まい手（=クライアント）さらには、街・地域に住まうヒト・訪れるヒトたちにとって『豊かな対話を営むための住空間』を創造することが本計画のテーマである。

（敷地面積≒240㎡）
配置図S=1:500

○ 対象敷地の方角特性

対象敷地の道を挟んだ南西側の緩やかな傾斜面は、草本の緑→樹木へと「季節」により風景の表情が変化する雑木林でおおわれ、その向こう側には、大きく"つくばの街"が広がる。北東側は、県道を挟んで山林があり、交通の利便性が良いにもかかわらず、雑多な音などが聞こえにくい静かな場所である。

○ 配置計画+ボリューム検討

日常的に車を利用されることが多いクライアントと話し合いを進めながら、敷地北東側に車庫を確保することとした。対象敷地が、公の道路に挟まれているという固有の特徴を持ち合わせているため、車庫は、敷地内を北西側⇔南東側と貫通出来ることにした。この配置により、雨の日などでも、速やかに住居への出入りが可能となった。

○ プランニング

1階を『導入部』として車庫からつながる車庫・玄関・客間・機械室と設定する。この時、玄関（玄関ポーチ）・車庫（車庫ポーチ）はセンサーにより連動して点灯する照明計画が施され、表情の異なる"あかり"が"ヒト"を出迎えてくれる。

「①他者との対話のための空間」として設定された3階部分は、主にリビングダイニング・キッチンとして計画し、屋上に屋根のあるテラスが広がっている様子をイメージしながら、開放感のある計画としている。

「②自己との対話のための空間」として設定された2階部分は、主にクライアントのプライベートスペースとして計画されているが、開仕切り戸は全て収納可能であると同時に、2階フロアー中央付近に大きな納戸を配置することで、開仕切り戸を全て収納した場合にでも、空間に起伏が生じ、表面的に適度な大きさで利用することが可能となっている。また、家族構成や生活状況が変化した場合にでも、開仕切り戸をうまく利用することで対応可能として計画している。

空間の性格付けを「境界=外壁」によって偏重に計画することを前提とし、「2つの空間」で構成される3層のボリュームの向きは、"近隣"からの視線を考慮しつつ、南西方向に大きく開く、"街"を一望出来る計画とした。

3階平面図S=1:150

2階平面図S=1:150

1階平面図S=1:150

○「性格付けされた空間」に用途を配置

今計画では、「対話のための空間」を主軸として計画していたため、「生活状況が変化した」などといった時には、すみやかに用途の配置変更がしやすいように配置していくこととする。

断面構成図

階	空間	性格	用途	換気	床面積
3	他者との対話のための空間	具体的風景が背景にある空間	キッチン ダイニング	台所 浴所	㎡ 98.87
2	自己との対話のための空間	抽象的な印象の空間	寝室 書斎	浴室 浴所	㎡ 105.64
1	導入部		車庫 玄関 客室	機械室 浴所	㎡ 51.32
	合計				㎡ 255.83

「デザインの力」を信じる

環境破壊を含めて、多岐にわたる出口の見えない問題をかかえる都市社会の中で、私たちは、「あたりまえ」という気持ちと共に日常をおくりがちなのではないだろうか。

慎重に計画された「境界=外壁」は、利用者（=クライアント）さらには、街に住まう人・訪れる人たちが様々な方法で変わず対話を補う「新たな空間体験」を可能にし、その体験は、今まで思いもしなかった出来事に、フッと立ち止まる「勇気と余裕」をもたらしてくれるかもしれない。